

観察者との関係性が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響

○山本恭子
(神戸学院大学)

キーワード: 表出行動, 観察者, 関係性

Effect of personal relationships with observer on dyadic emotional communication

Kyoko YAMAMOTO

(Faculty of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University)

Key words: Expressive behavior, Observer, Personal relationships

目 的

日常生活において、私たちはさまざまな状況下で感情のコミュニケーションを行っている。その際、親しい相手と二人きりでコミュニケーションを行う状況と、喫茶店や電車内などコミュニケーションの当事者以外の他者がいるような状況では、感情表出は異なることが推測される。山本 (2009) は、面識のない観察者の有無を操作した実験状況において、友人関係または未知関係のペアに快感情喚起刺激を呈示し、その間の表出行動を測定している。その結果、面識のない観察者の存在は未知関係のペアの表出行動を促進する一方、友人関係のペアは外部観察者の影響を受けないことを見いだした。しかしながら、友人関係においても、大学の教室内など知人のみが周りに存在する場合と、バスや電車の中といった見知らぬ他人が存在する場合では、感情表出の様式は異なるのではないだろうか。そこで本研究では、友人関係のペアを対象に、観察者との関係性が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響を検討する。

方 法

実験参加者 同性友人のペア 23 組 46 名 (平均年齢 19.26 ± 1.24 歳)。これらの参加者は、観察者なし群 8 組 16 名、未知観察者群 9 組 18 名、友人観察者群 6 組 12 名に群分けされた。

観察者 未知観察者群では、参加者と面識のない同性の学部生が観察者を担当した。友人観察者群は、3 人組で実験に参加したもので、そのうち 1 名を観察者に割り当てた。

質問紙 (1) 一般感情尺度 (小川ら, 2000): 4 件法, 24 項目。肯定的感情 (PA), 否定的感情 (NA), 安静状態 (CA) の 3 つの下位尺度からなる。(2) 他者意識および自己意識: 他者意識尺度 (辻, 1993) から内的他者意識の 7 項目と、自己意識尺度 (菅原, 1984) から公的自己意識の 6 項目を、状態を問う言い回しに変えて使用した。7 件法。(3) 会話満足度: 木村ら (2005) から抜粋した 6 項目, 7 件法。

手続き 実験室内には、プロンプター (TV モニターとハーフミラーが一体化した隠し撮り用の装置) と実験参加者が着席する椅子 2 脚を設置した。また、観察者が着席する椅子を実験参加者から約 3m 斜め前方の位置に設置した。教示を行った後、実験参加者に快感情を喚起するビデオ映像を 2 分間呈示した (映像セッション)。映像呈示後、一般感情尺度と他者意識・自己意識尺度に回答させた。次に、視聴した映像について 5 分間自由に会話させた (会話セッション)。会話後には、一般感情尺度、他者意識・自己意識尺度、会話満足度に回答を求めた。観察者のある群では、両セッション中に観察者が入室し、メモを取りながら観察を行った。また、実験中の実験参加者の表出行動はビデオで撮影された。

表出行動のコーディング 2 名のコーダーが映像セッションと会話セッションにおける笑顔、視線、発話の累積時間を

計測した。コーダー間の一致率は $r=.89-.99$ であり、分析には 2 名のコーダーの平均値を用いた。

結 果

映像セッションにおける表出行動 笑顔、視線、発話の各累積時間について、群を要因とする分散分析を行った。その結果、発話の累積時間において主効果が認められ、友人観察者群が未知観察者群や観察者なし群に比べて、有意に長い発話時間を示した ($F(2,43)=11.85, p<.001$; 図 1)。笑顔の累積時間も同様のパターンを示したが、統計的に有意ではなかった。

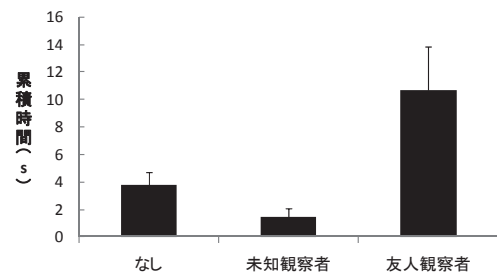


図1 発話の累積時間

会話セッションにおける表出行動 各指標について、映像セッションと同様の分析を行った。その結果、発話の累積時間において群の主効果に有意傾向が認められた ($F(2,43)=2.46, p<.10$)。その他の指標においては、有意な差は認められなかった。

主観的指標 表出行動と主観的指標の関連を検討するため、セッションごとに相関係数を算出した (表 1)。会話セッションにおいて、笑顔は PA 得点、会話満足度と正の相関を示した。視線は NA 得点と負の相関関係にあった。発話は会話満足度と正の相関、公的自己意識と負の相関を示した。

表1 会話セッションにおける表出行動と主観的指標の相関

	CA	NA	PA	会話満足	公的自己	内的他者
笑顔	.23	-.12	.46 **	.33 *	-.09	.12
視線	.10	-.36 *	.12	.22	-.07	.12
発話	.21	-.17	.21	.35 *	-.41 **	-.19

考 察

発話は友人観察者の存在により促進される一方、笑顔や視線は観察者の影響を受けなかった。表出行動と主観的指標との関連について、公的自己意識が高いほど発話が少ないことが見いだされた。笑顔や視線は他者意識・自己意識とは相関しなかったが、主観的感情状態と関係があった。これらのことから、面識のある外部他者が存在する場合には、言語を介して感情伝達が行なわれると考えられる。一方、友人間の非言語的表出は、観察者との関係性による調整は行われず、主観的感情状態を反映したものであると考えられる。

注) 本研究は科研費 (若手研究(B)21730502) の助成を受けた。